



埼玉県のマスコット コハトン

Lib. Letter

2012 Summer [6～8月]季刊

平成24年5月26日 通巻 第28号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

博物館の愉しみ

日本で最初の博物館が誕生してから今年で140年になります。博物館では、古今東西の様々なモノたちを見ることができます。そこで私たちは、時間や場所を超えて、とおいところにいる人たちの文化の営みの一端にふれることができるのです。

今回は、そんな文化の宝箱「博物館」に関する資料を集めました。図書館の資料で博物館の世界を「愉しんで」いただければ幸いです。

1 博物館のはじまり

◆ ミュージアムの語源

博物館＝Museum（ミュージアム）という言葉の語源は、ギリシャ語の Mouseion（ムウセイオン：「ムウサイの居るところ」あるいは「ムウサイの神殿」のこと）で、学芸の各部門をつかさどる9人の女神ムウサイ（ミューズ）の住み家を指すと言われます。

このムウサイの神殿は、ギリシャに紀元前5世紀には誕生していたようです。哲学者プラトン（Platon：427-347B.C.）が紀元前387年にアテネ市内に創設したアカデメイア（akademeia）の中に9人の女神の神殿ムウセイオンが設けられていました。

アカデメイアではアリストテレス（Aristoteles：388-322B.C.）もプラトンの指導を受けています。

このギリシャのムウセイオンは神殿という面が強かったようです。

9人の女神ムウサイ（ミューズ）
それぞれの名前はカリオペ（叙事詩）、クレイオ（史学）、エウテルペ（抒情詩）、タリア（喜劇）、メルポメネ（悲劇）、テルプシオホレ（舞踊）、エラト（恋愛詩）、ポリュムニア（聖歌）、ウラニア（天文学）といえます。

◆ エジプトのアレクサンドリアのムウセイオン

紀元前305年エジプト王朝を創建したプトレマイオス1世が、王都アレクサンドリアに「ムウサイ学園」を設立しました。このアレクサンドリアのムウサイ学園には、ムウセイオンや大図書館が建てられ、学術研究センターとして長く続きました。

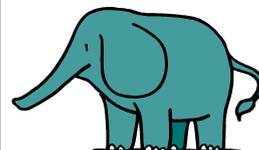
「学問の府としてヨーロッパ近世に至るまでこれに比肩するものはない。」※ともいわれます。プトレマイオス2世、3世の時代に最も栄えました。

歴代の王が私財を投じて海外から学者を集め、彼らに手当と食事とを給し、財を共有する団体として研究に従事させました。研究の主流は文献学でしたが、数学、物理学、天文学、解剖学などにも優れた成果を残しています。

プトレマイオス朝の時代が終わり、ローマがエジプトを支配するようになった後、ムウセイオンはローマ皇帝の保護のもと発展しました。しかし、3世紀になり、皇帝が

動物園もあった？

アレクサンドリアのムウセイオンには、プトレマイオス2世の頃にイヌやロバ、ゾウなどの動物も飼育されていたようです。



異教徒迫害の政策をとるとムウセイオンのもっていた特権も奪われてしまいます。そしてテシオドス帝の時代の神殿破壊命令により、ムウセイオンは幕を閉じるのです。

ムウセイオンは、実証的な色彩の強い学術の研究センターで、高度な教育機関と考えられています。そこにはものが保存され、教育や研究の素材として活用されていましたが、それを系統的に並べて見せるということには至っていません。
(※『世界大百科事典 27』による)

◆ 教会のコレクション・貴族のコレクション

中世のヨーロッパでは、キリスト教会が珍奇な物のコレクションを維持します。また、ハプスブルグ家などの王族やメディチ家などの貴族が個人的に蒐集したコレクション（キャビネット）などがありました。ドイツではアルコール漬の動植物標本や土俗資料、各種の機械類などを集めて展示するヴンダーカマー（「驚異の部屋」「不思議の部屋」などと訳されます）が各地で始められました。

◆ そして博物館（museum）へ

17世紀になり、各国でミュージアムという言葉がコレクションの保存、展示をする施設に対して用いられるようになりました。

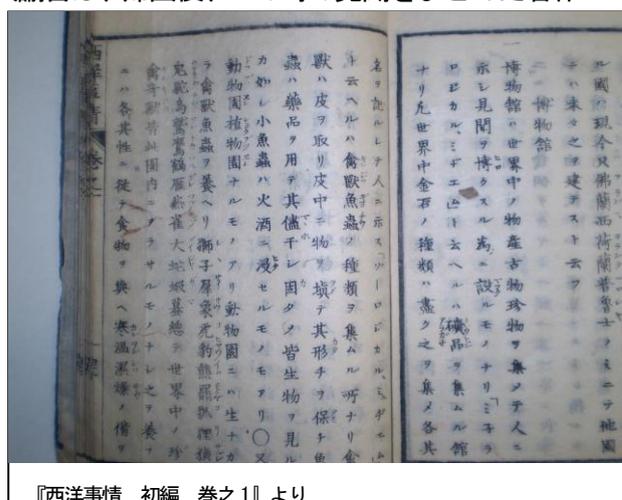
そして18世紀に、今日のような近代的な博物館がヨーロッパにできます。1759年、イギリスに大英博物館（国立博物館）が創設され、1793年フランスにルーブル美術館（国立美術博物館）が開館するのです。

参考文献：『図解博物館史』（椎名仙卓／著 雄山閣 1993）
『世界大百科事典 27』p651<ムセイオン（金澤良樹著）>（平凡社 2005）
『博物館の歴史』（高橋雄造／著 法政大学出版局 2008）
『世界大百科事典 22』<博物館（青木国夫著）>（平凡社 2005）

2 日本で最初の「博物館」

◆ 「博物館」がやってきた

日本で「博物館」という言葉が使われるようになるのは、幕末のころです。万延元年（1860）年に日米修好条約批准書交換のためアメリカに渡った使節団の日記（名村元度「亜行日記」）に「博物館」を見学したことが記されています。そして、この2年後文久2年（1862）にヨーロッパに派遣された竹内保徳使節団の一員だった福沢諭吉は、帰国後、この時の見聞をまとめた著作「西洋事情」の中で「博物館」について紹介しています。「西洋事情」は慶応2年（1866）秋から発売され20万部から25万部の発行であったと言われます。この本により、「博物館」の語とその施設についての情報が人々に浸透していったと考えられています。



『西洋事情 初編 巻之1』より

◆ 日本の「博物館」のはじまり

日本で最初に開館した博物館は、上野の東京国立博物館です。この歴史をたどってみましょう。

明治5年（1872）3月10日、湯島の聖堂で文部省博物館として最初の博覧会を開催します。これが日本で最初の「博物館」の開館です。

この時陳列されたのは「漢委奴国王」の金印、シーボルトの息子アレクサンドルが出品した「澳国（おうこく）軍服」、名古屋城の金鯨などで、多くの観客を集めました。博覧会後も毎月1と6のつく日には公開をしたようです。当時の館藏品は標本類だけで多くは外部からの出品でした。

◆ ウィーン万国博覧会

館蔵品を充実させるきっかけとなったのは明治6年のウィーン万国博覧会（澳国博覧会）でした。オーストリア公使から要請があり参加したものです。参加のため、政府は出品物を広く全国から集めました。各地の特産品や珍奇なものを2品ずつ差し出させ、1点は常備陳列品として博物館に納めたのです。社寺や華族の所有する宝物の調査も行われました。作品の蒐集や出品交渉などは、その後の博物館運営にも役立ちました。

明治15年（1882）博物館は上野に移転します。

◆ 東京国立博物館のはじまりを支えた人々

町田久成（まちだ ひさなり 1838-1897）と

田中芳男（たなか よしお 1838-1916）

町田はもと薩摩藩の大目付で、藩留学生の監督役として慶応元年（1865）に渡英しました。明治政府では外交の事務を、ついで大学にうつり物産局を担当します。

田中は江戸幕府の洋学研究教育機関・蕃書調所に勤務、慶応3年のパリ万国博覧会に使節として参加し、のち新政府では大学に出仕し物産局勤務となります。

明治4年、2人のいた大学は文部省となり、物産局は「博物局」と改称します。5年1月、町田と田中は「澳国博覧会御用掛」を命ぜられ、澳国博覧会事務局と文部省博物局は一体化します。

博物局は、事務処理の他に、書籍の編集・翻訳、剥製や腊葉標本の製作なども担当していました。湯島の聖堂で行われた博覧会にもこの2人の力が大いに発揮されたのでした。



明治40年の「上野公園之図」 《『東京案内 下』より》

蜷川式胤（にながわ のりたね 1835-1832）

天保6年（1835）京都に生まれます。幼いころから古物が好きでした（古物収集家としても知られています）。明治2年（1869）、明治新政府の制度局取調御用掛となります。その後、京都に一度戻りますが、4年に再び上京し、12月に文部省博物局に兼務で勤めることとなります。そして田中芳男や町田久成らとともに湯島聖堂の博覧会の準備にあたります。

あの人もこの人も・・・

ジョサイア・コンドル（Josiah Conder : 1852-1920）

明治15年上野に移転した旧本館の設計をしました。ロンドンで生まれた建築家で、明治10年から明治17年の8年間「お雇い外国人」として日本で様々な建築物の設計をします。鹿鳴館を設計したことでも有名です。

岡倉天心（1863-1913）は、京都・奈良に新しくできた博物館と一緒に「帝国博物館」となった博物館の総長九鬼隆一（1852-1931）とともに明治20年代の博物館で活躍しました。

文豪森鷗外（1862-1922）も大正6年12月から亡くなる大正11年まで総長兼図書頭として帝室博物館にいました。謹厳な勤務姿勢でありながら、けして近寄りがたい人ではなかったと伝えられています。



◆ 関東大震災と博物館

大正12年9月1日、関東を襲った大地震で、東京は壊滅的なダメージを受けました。

当時の総長の犬島義脩は、猛獣の脱走を心配してか、ただちに動物園に駆けつけたそうです。

博物館の被害は、旧本館、第2号館、第3号館が使用不可能の打撃を受けましたが、負傷者はなく、蔵品も89件が破損したのみでした。構内には多くの被災者が逃げ込んできました。宮内

省の職員が炊き出し用の米を運んできたりもしたそうです。

翌13年に表慶館のみで展示を再開します。しばらくの間この表慶館のみで展示を行いました。この年、皇太子（昭和天皇）の成婚記念として、上野公園・動物園を東京市に下賜します。

また、14年に博物館は自然科学系の蔵品（天産部列品）を文部省東京博物館（現在の国立科学博物館）へ移管し、天産課が廃止されます。このことにより、「美術博物館」への一步を踏み出すこととなりました。

◆ 復興開館

昭和13年、現在の本館が開館します。館の組織や列品の区分を変更し、東洋古美術品の美術館に变身しました。

新館の規模は大きく、館蔵品だけでは満たせないほど展示スペースが広くなりました。開館陳列は1階に考古・染織・陶磁・彫刻、2階に絵画・書跡などの陳列区分で、全国から集められた名品が並びました。陳列された1800点のうち約半数が外部からの出品でした。

◆ 戦争と博物館・戦後の博物館

太平洋戦争により博物館は、収蔵品を疎開させて昭和20年3月から休館しましたが、翌21年3月24日には疎開から帰ってきた美術品を陳列して開館しています。22年5月3日、博物館は国に移管され、「国立博物館」となりました。25年、文化財保護委員会の発足とともに、国立博物館はその附属機関となり、27年に「東京国立博物館」と改称します。

その後、国の行政改革の一環として、成立した独立法人通則法により、平成13年4月1日、東京、京都、奈良の国立博物館3館の組織は、「独立行政法人国立博物館」となりました。17年10月には九州国立博物館が開館しています。

◆ なつかしの特別展示

ツタンカーメン展

昭和40年に東京国立博物館、京都市美術館、福岡県文化会館と3つの会場を巡回して行われました。東京国立博物館の入場者数は51日間で122万4166人でモナ・リザ展に抜かれるまでの最多動員記録でした。（入場者数は『東京国立博物館百年史 資料編』による）



明治4年	1871年	文部省に博物局設置
明治5年	1872年	3月10日湯島聖堂で文部省博物館として最初の博覧会を開催。これをもって博物館の創立・開館とする。同所に近代図書館としての書籍館(しよじやくかん)を合わせて開館。当時は動物園、植物園を含む総合博物館が構想されていた。
明治8年	1875年	博覧会事務局が内務省の所管となり博物館と改称。
明治9年	1876年	上野公園が博物館所管となる。
明治14年	1881年	内務省所管から農務省所管となる。上野公園内旧寛永寺本坊跡にコンドル設計の博物館新館(旧本館)が竣工し、第二回内国勲業博覧会で美術館として使用される。新館移転のため内山下町博物館閉館。動物園建設工事に着手。
明治15年	1882年	新館(旧本館)開館。付属動物園、浅草文庫とともに一般に公開される。法隆寺献納宝物を収蔵。旧十輪院宝蔵(校倉)を移築。
明治19年	1886年	宮内省の所管となる。
明治22年	1889年	帝国博物館となる。総長に九鬼隆一、美術部長に岡倉天心が就任。あわせて、帝国京都博物館、帝国奈良博物館を設置。
明治33年	1900年	東京帝室博物館と改称。
明治42年	1909年	皇太子殿下(大正天皇)御成婚記念として、東宮御慶事奉祝会より献上された表慶館開館。
大正6年	1917年	森鷗外、総長に就任。
大正12年	1923年	関東大震災で旧本館が損壊。翌年まで休館。
大正13年	1924年	皇太子殿下(昭和天皇)の御成婚記念として上野公園・動物園を東京市に下賜。4月表慶館のみで展示を再開。
大正14年	1925年	自然史関係の収蔵品を東京博物館(現在の国立科学博物館)等へ引き渡す。
昭和13年	1938年	帝室博物館復興賛成会より献上された現在の本館が開館。「日本帝国美術略史」刊行。
昭和16年	1941年	戦争被害を避けるため美術品の疎開がはじまる。12月太平洋戦争始まる。
昭和20年	1945年	太平洋戦争による空襲激化のため、3月観覧を停止。8月15日太平洋戦争終結。
昭和21年	1946年	3月観覧を再開。
昭和22年	1947年	宮内省より文部省に移管。国立博物館と改称。
昭和27年	1952年	東京国立博物館と改称。
昭和39年	1964年	法隆寺宝物館(旧館)収蔵庫併設展示施設として開館(毎週木曜日、晴天時のみ公開)。
昭和40年	1965年	ツタンカーメン展開催。
昭和43年	1968年	文化庁の発足により同庁に移管。10月東洋館開館。
昭和49年	1974年	モナ・リザ展開催。入場者過去最高の151万人を記録。
昭和59年	1984年	資料館開館。
平成11年	1999年	7月法隆寺宝物館(新館)開館。10月皇太子殿下御成婚を記念して平成館開館。
平成13年	2001年	東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館の3館を統合した独立行政法人国立博物館を設立。
平成19年	2007年	東京国立博物館の所属する独立行政法人国立博物館と独立行政法人文化財研究所が統合され「独立行政法人国立文化財機構」が発足。

「年表 東京国立博物館の歩み」(東京国立博物館ホームページから抜粋・一部加筆して作成)

http://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=155

モナ・リザ展

昭和49年に開催されました（4月20日から6月10日48日間）。ルーブル美術館所蔵レオナルド・ダ・ヴィンチ作の絵画「モナ・リザ」をフランスから借り受けて展示したものです。入場者総数は150万5239人、最多動員記録です。1日の入場者数が最も多かったのは、6月9日日曜日の6万1466人でした。『「モナ・リザ展」記録』では開催の経緯や、展示会場の様子・入場を待つ人の列などの写真、返却輸送車の列の体系図などを見ることができます。（入場者数は『「モナ・リザ展」記録』による）



参考文献：「亜行日記」名村元度著（『万延元年遣米使節史料集成 第2巻』

日米修好通商百年記念行事運営会／編 風間書房 1961）

『西洋事情 初編 卷之1』（福沢諭吉／纂 [出版者不明] [1866]）

『東京国立博物館百年史』（資料編とも）（東京国立博物館／編 東京国立博物館 1973）

『こんなに面白い東京国立博物館』（新潮社／編 新潮社 2005）

『「モナ・リザ展」記録』（文化庁／編 文化庁 1975）

『東京案内 下巻』（東京市／編 東京市 1907）

3 博物館の舞台ウラ

博物館の仕事は、おおまかに言うと資料の収集・保存（保管・整理）・調査研究・展示です。そのうち、私たちの目によくふれるのは「展示」の仕事ではないでしょうか。そこで、展示の仕事について見てみましょう

展示の大まかな流れは右の図のようになります。それぞれの仕事は「階段のように一段ずつステップを踏みながら進んでゆくわけではなく、それぞれのプロセスが少しずつ重なり合いながら進行して※」ゆくそうです。

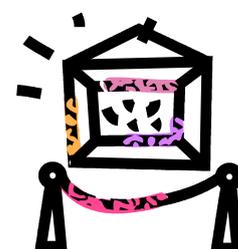
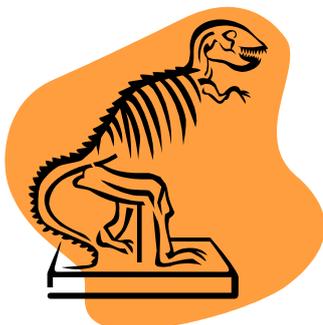
※『キュレーターになる!』（住友文彦／編 フィルムアート社 2009）

博物館展示の工程については、次の図書にも記述があります。

- ・『学芸員の仕事』（神奈川県博物館協会／編 岩田書院 2005）
- ・『博物館の仕事』（8人の学芸員／著 岩田書院 2007）

展示のできるまで	
企画立案	コンセプトづくり、出品作家・作品の選定、関連イベントの立案
	↓
実現のための実務	予算作成、借用依頼、助成金申請・協賛依頼、作家との打ち合わせなど
	↓
プレスリリース、広報印刷物の制作	
	↓
カタログの編集、テキスト執筆	
	↓
作品の借用、輸送の手配	
	↓
展示	
	↓
作品の返却	

『キュレーターになる!』を参考に作成



◆ こんな資料もあります

『学芸員講習講義要綱』（文部省社会教育局／編 文部省社会教育局 1953）

昭和26年12月に博物館法が制定されます。その博物館法に規定されている学芸員の講習が昭和27年に初めて、東京芸術大学において行われました。「これを契機に、講習講義内容を整理し、充実されることが痛感された」（「はしがき」より）ことから、作成された講義要綱です。

昭和28年に発行されています。内容は「博物館概論」「博物館資料収集保管法（人文科学部門・自然科学部門）」「博物館資料分類及び目録法（人文科学部門・自然科学部門）」「博物館資料展示法（人文科学部門・自然科学部門）」「各論（動物園・植物園・水族館）」となっています。当時の学芸員講習での講義内容の項目を知ることができます。

4 さまざまな博物館

◆ ユニークな博物館

『世界の奇妙な博物館』（ミッセル・ロブリック／著 筑摩書房 2009）

アメリカの「国際スパイ博物館」やイギリスの「英国芝刈機博物館」などなど・ちょっと行ってみたいくなるような博物館を紹介した本です。日本の伏見稲荷神社や目黒寄生虫博物館なども掲載されています。

また、「焦げた料理の博物館」のようなインターネット上のみの博物館も紹介されています。

焦げた料理の博物館 <http://www.burntfoodmuseum.com/index.html>（英文）

埼玉県の博物館

埼玉県立の博物館施設にはこんなものがあります

埼玉県立歴史と民俗の博物館（さいたま市大宮区高鼻町4-219）

<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>

埼玉県立さきたま史跡の博物館（埼玉県行田市埼玉4834）

<http://www.sakitama-muse.spec.ed.jp/>

埼玉県立嵐山史跡の博物館（埼玉県比企郡嵐山町菅谷757）

<http://www.ranzan-shiseki.spec.ed.jp/>

埼玉県立近代美術館（埼玉県さいたま市浦和区常盤9-30-1） <http://www.momas.jp/>

埼玉県立自然の博物館（2012年10月5日まで休館中）

（埼玉県秩父郡長瀬町長瀬1417-1） <http://www.shizen.spec.ed.jp/>

埼玉県立川の博物館（埼玉県大里郡寄居町大字小園39） <http://www.river-museum.jp/>



◆ こんな資料もあります

『全国博物館案内』（日本博物館協会／編 刀江書院 1932）

昭和7年に作成された博物館案内です。昭和5年東京で開催された第二回全国博物館大会の希望決議によって「全国博物館の所在地、蒐集品の種類並に観覧見学に必要な事項を一小冊子に纏めて刊行することは、学者教育課並に一般旅行者に非常な便利を与えるばかりでなく、同時にまた本邦博物館事業の発達上にも寄与するところが多かろうと云うので、」（「序言」より）日本博物館協会が刊行したものです。地方（関東に始まり奥羽～九州、台湾・北海道・樺太・朝鮮・関東州）とに当時の博物館施設の概要を見てゆくことができます。入場料が掲載されている施設もあります。また、動物園・水族館・植物園なども掲載されています。



◆ 世界の博物館・美術館から

大英博物館 (The British Museum) <http://www.britishmuseum.org/>
イギリスにある「歴史的に世界最古・最大といわれる」(『物語大英博物館』より)博物館です。18世紀のロンドンで旧モンタギュー公の屋敷を買収して開館準備を行い、1759年1月に一般に公開されました。開館以来約250年間、入館料が無料なのです。エジプトの「死者の書」(パピルス紙に描かれた第18王朝時代：紀元前1552～1306年)の書)や古代ケルトの芸術品などその宝物は数知れません。日本の博物館でも「大英博物館古代ギリシャ展」(2010年 東京・神戸 国立西洋美術館)、「大英博物館古代エジプト展」(2011年 東京・福岡 森アーツセンターギャラリー)などが開催されました。

ルーブル美術館 (musee du Louvre) <http://www.louvre.fr/>
<http://www.louvre.fr/jp> (日本語サイト)
フランス革命の時代、パリのルーブル宮殿を美術館にして1793年に一般公開されます。以来約200年、日本にもやってきた「モナ・リザ」をはじめとする世界の名画や彫刻、古代オリエントやエジプト文明等のコレクションなどを収蔵しています。一度は訪れてみたい美術館ではないでしょうか。前庭のガラスのピラミッドも有名です。



故宮博物院 <http://www.npm.gov.tw/nprwebadmin.jsp?do=index> (国立故宮博物院 (台北))
1925年、中国の紫禁城内に成立しました。旧清朝宮廷の文物を収蔵していましたが、第二次世界大戦中に文物は運びだされ、戦後に建設された台北の故宮博物院に移されました。日本では、2012年に東京国立博物館で「北京故宮博物院展」が開催されたのが記憶に新しいところです。



より詳しく知りたい方へ

～県立図書館にある今回の展示資料～

- ※ 『書名』(著者名 発行者 出版年 所蔵館)【県立図書館の請求記号】(所蔵館・帯出区分)
- ※ 以下に掲載した資料は、県立熊谷図書館2階ロビーで8月26日まで展示中です。

1 博物館のはじまり

◆ エジプトのアレクサンドリア

- 『アレクサンドリアの興亡』(ジャスティン・ポラード/著 主婦の友社 2009)【242.03/7L】
- 『謎の古代都市アレクサンドリア』(野町啓/著 講談社 2000)【242.03/ナ】
- 『アレクサンドリア』(E. M. フォースター/著 晶文社 1988)【242/7】
- 『知識の灯台』(デレク・フラワー/著 柏書房 2003)【242.03/フ】

◆ 貴族のコレクション

- 『愉悦の蒐集ヴンダーカンマーの謎』(小宮正安/著 集英社 2007)【069.023/1E】
- 『コレクション』(クシシトフ・ポミアン/著 平凡社 1992)【201/P78】
- 『驚異の部屋』(エリーザベト・シャイヒャー/著 平凡社 1990)【D706.9/シ】(久喜)

『蒐集』（ジョン・エルスナー／編 研究社出版 1998）【790.4/シ】（久喜）
『芸術の蒐集』（ウンベルト・エーコ／編著 東洋書林 2011）【701.1/ケ】（久喜）

◆ 博物館の歴史

『博物館の歴史』（高橋雄造／著 法政大学出版局 2008）【069.02/ハ】
『図解博物館史』（椎名仙卓／著 雄山閣出版 1993）【069/シ】
『博物館学講座 2 日本と世界の博物館史』（雄山閣出版 1981）【069/ハ】
『博物館の風景』（倉田公裕／著 六興出版 1988）【069/ハ】
『博物館のレトリック』（ドナルド・ホーン／著 リプロポート 1990）【069/ハ】
『ミュージアムと記憶』（スーザン・A. クレイン／編著 ありな書房 2009）【069.04/ミ】

2 日本で最初の「博物館」

◆ 日本で「博物館」という語が使われ始めたころ

『西洋事情 初編 卷之1』
（福沢諭吉／纂 [出版者不明] [1866]）【タ302.3/F85】（浦和・禁帯出）
『福沢諭吉全集 第1巻』（慶応義塾／編 岩波書店 1969）【081.6/フ】
『万延元年のアメリカ報告』（宮永孝／著 新潮社 1990）【210.59/マ】
『海を渡った侍たち』（石川栄吉／著 読売新聞社 1997）【210.5953/ウミ】
『万延元年遣米使節史料集成 第2巻』
（日米修好通商百年記念行事運営会／編 風間書房 1961）【210.59/マ】

◆ 東京国立博物館の歴史

『好古家たちの19世紀』（鈴木廣之／著 吉川弘文館 2003）【702.16/コ】（久喜）
『明治博物館事始め』（椎名仙卓／著 思文閣出版 1989）【069/メ】
『東京案内 下巻』（東京市／編 東京市 1907）【291.3/To46】（禁帯出）
『日本博物館成立史』（椎名仙卓／著 雄山閣 2005）【069.021/コホ】
『鹿鳴館を創った男』（畠山けんじ／著 河出書房新社 1998）【289.3/コ705】
『「鹿鳴館の建築家ジョサイア・コンドル展」図録』
（鈴木博之／監修 建築画報社 2009）【289.3/コ705】

【蜷川式胤】

『好古研究資料集成 卷6（考古官職編）』（中澤伸弘／編・解説 クレス出版 2011）【081/コ】
『明治維新と歴史意識』（明治維新史学会／編 吉川弘文館 2005）【210.61/メ】

【田中芳男】

『日本の博物館の父田中芳男展』
（飯田市美術博物館／編 飯田市美術博物館 1999）【289.1/タ040】
『田中芳男伝』（みやじましげる／編 大空社 2000）【289.1/タ040】

【町田久成】

『博物館の誕生』（関秀夫／著 岩波書店 2005）【069.61/ハ】

【岡倉天心】

『岡倉天心の思想探訪』（坪内隆彦／著 勁草書房 1998）【289.1/カ036】
『岡倉天心』（ワタリウム美術館／編 平凡社 2005）【289.1/カ036】
『岡倉天心アルバム』（中村愿／編 中央公論美術出版 2000）【289.1/カ036】
『いま天心を語る』（「岡倉天心-芸術教育の歩み-」展実行委員会／編
東京藝術大学出版会 2010）【289.1/カ036】
『昭和初期の博物館建築』（博物館建築研究会／編 東海大学出版会 2007）【526.06/シヨ】（久喜）
『大正博物館秘話』（椎名仙卓／著 論創社 2002）【069.021/タイ】
『帝室博物館年報 大正15年』（帝室博物館／編 帝室博物館 1927）【069/Te28】
『近代日本と博物館』（椎名仙卓／著 雄山閣 2010）【069.021/キ】
『帝室博物館略史』（帝室博物館／編 帝室博物館 1938）【069.6/テ】（禁帯出）
『東京帝室博物館復興開館陳列案内』
（東京帝室博物館／編 東京帝室博物館 1938）【カ069.6/ト】（禁帯出）

- 『東洋館』(東京国立博物館／編 東京国立博物館 1968)【タ069/To46】(浦和・禁帯出)
- 『東洋美術展』(東京国立博物館／編 東京国立博物館 1968)【タ702.2/To46】(浦和・禁帯出)
- 『「モナ・リザ展」記録』(文化庁／編 文化庁 1975)【R706.9/モ】(久喜・禁帯出)
- 『ツタンカーメン展』(朝日新聞社 1965)【タ242/A82】(浦和・禁帯出)
- 雑誌『アサヒグラフ 1965年11月1日増刊号(ツタンカーメン展)』
(朝日新聞社 1965.11)(禁帯出)
- 雑誌『アサヒグラフ 1965年8月25日増刊号(ツタンカーメン展)』
(朝日新聞社 1965.8)(禁帯出)
- 『東京国立博物館所蔵名品目録』
(東京国立博物館／編 東京国立博物館 1952)【ア703.8/ト】(禁帯出)
- 『東京国立博物館百年史』(東京国立博物館／編 東京国立博物館 1973)【069.61/トウ】
- 『東京国立博物館百年史 資料編』
(東京国立博物館／編 東京国立博物館 1973)【069.61/トウ】
- 『目でみる120年』(東京国立博物館／編 東京国立博物館 1992)【069.6/メ】
- 『こんなに面白い東京国立博物館』(新潮社／編 新潮社 2005)【069.61/コン】
- 『ミュージアムサイエンス v.1 2002』
(東京国立博物館企画部保存修復課／編 クバプロ 2002)【069.4/ミユ】
- 『日本の博物館史』(金山喜昭／著 慶友社 2001)【069.021/ニホ】
- 『日本博物館発達史』(椎名仙卓／著 雄山閣出版 1988)【069/ニ】

3 博物館の舞台ウラ

◆ 学芸員の仕事

- 『博物館の仕事』(8人の学芸員／著 岩田書院 2007)【069/ハウ】
- 『学芸員講習講義要綱』(文部省社会教育局／編 文部省社会教育局 1953)【069/Mo31】
- 『学芸員の仕事』(神奈川県博物館協会／編 岩田書院 2005)【069.3/カ】
- 『キュレーターになる!』(住友文彦／編 フィルムアート社 2009)【069.3/キウ】
- 『博物館体験』(ジョン・H. フォーク／著 雄山閣出版 1996)【069/ハ】

◆ 展示法

- 『博物館の歴史展示の実際』(村上義彦／著 雄山閣出版 1992)【069.5/ハ】
- 『博物館学講座 7 展示と展示法』(雄山閣出版 1981)【069/ハ】
- 『博物館をみせる』(K. マックリーン／著 玉川大学出版部 2003)【069.5/ハウ】
- 『博物館展示の研究』(青木豊／著 雄山閣 2003)【069.5/ハウ】
- 『展示学』(油井隆／著 電通 1988)【069/A14】
- 『展示論』(日本展示学会出版事業委員会／企画・編集 雄山閣 2010)【069.5/テン】
- 『展示』(博物館学研究会／編 博物館学研究会 1971)【069.5/テ】

◆ 博物館

- 『博物館学ハンドブック』(高橋隆博／編著 関西大学出版部 2005)【069/ハウ】
- 『博物館ができるまで』(滋賀県立琵琶湖博物館 [1997])【069.6161/ハウ】
- 『新時代の博物館学』
(全国大学博物館学講座協議会西日本部会／編 芙蓉書房出版 2012)【069/シン】
- 『博物館学Q&A』(清水久夫／著 慶友社 2005)【069/ハウ】
- 『博物館の楽しみ方』(千地万造／著 講談社 1994)【069/ハ】
- 『博物館は生きている』(広瀬鎮／〔著〕 日本放送出版協会 1980)【069/H72】
- 『博物館の世界』(梅棹忠夫／編 中央公論社 1980)【069/ハ】

4 さまざまな博物館

◆ さまざまな博物館

- 『博物館の博物誌』(吉羽和夫／著 刊々堂出版社 1980)【069/ハ】

『日本全国おもしろユニーク博物館・記念館』

(新人物往来社／編 新人物往来社 2006) 【069.021/ニホ】

『おススメ博物館』(小泉成史／著 文藝春秋 2002) 【069.021/ホ】

『世界の博物館』(川成洋／編 丸善 1999) 【069/ホ】

『世界の奇妙な博物館』(ミッシェル・ロヴリック／著 筑摩書房 2009) 【B069/ホ】

◆ **各地の博物館**

『欧米博物館の施設』(後藤守一／著 帝室博物館 1931) 【069.3/ホ】

『北の博物館』(宮内 令子／著 北海タイムス社 1991) 【069/キ】

『東京の博物館』(東京都博物館協議会／編 東京都博物館協議会 1991) 【069/ト】

『しずおかの博物館』(静岡県博物館協会／編 静岡新聞社 1987) 【069/シ】

『京・まちの博物館』(朝日新聞京都支局／編 淡交社 1982) 【069/キ】

『さいたまの博物館』(埼玉県自治文化課／編 埼玉県自治文化課 1986) 【S069/サ】

『あなたの街の博物館』(埼玉県博物館連絡協議会／編 幹書房 1998) 【S069/ア】

『探検博物館 3』(あいうえお館 1988) 【S069/タ】

『町の小さな博物館・美術館ガイド』

(猪又徹／[ほか] 編集協力 九州電力事業開発部地域振興室 1997) 【069.0219/マフ】

『全国博物館案内』(日本博物館協会／編 刀江書院 1932) 【069/N71】

『ヨーロッパの博物館』(カトリーヌ・バレ／著 雄松堂出版 2007) 【069.023/ヨロ】

『ミュージアムに見るアメリカ』(中富信夫／著 世界文化社 1995) 【069/ミ】

『中国博物館めぐり 上巻』(東京美術／共同編集 東京美術 1989) 【069/チ】

『中国博物館めぐり 下巻』(東京美術／共同編集 東京美術 1990) 【069/チ】

◆ **大英博物館・ルーブル美術館・故宮博物院**

『物語*大英博物館』(出口保夫／著 中央公論新社 2005) 【069.633/モ/】

『大英博物館』(藤野幸雄／著 岩波書店 1975) 【069/フ】

『大英博物館の舞台裏』(デイヴィッド・M. ウィルソン／著 平凡社 1994) 【069/ダ】

雑誌『別冊太陽 65957 (18) (ルーブル美術館) (2005年2月6日)』(平凡社 2005.2) (禁帯出)

『ルーヴルの騎手』(フィリップ・ソレルス／著 集英社 1998) 【289.3/テ/701】

『故宮博物院案内』(古屋奎二／編著 実業之日本社 1985) 【069/コ】

『故宮博物院物語』(古屋奎二／著 碩文社 1983) 【069/コ】

『故宮・ガイド』(謝新発／著 勁草書房 1988) 【069.6/コ】

『ふたつの故宮博物院』(野嶋剛／著 新潮社 2011.6) 【069.622/タ】

雑誌『別冊太陽 65957 (57) (台北故宮博物院) (2007年7月15日)』(平凡社 2007.7) (禁帯出)

※ 刊行後2年を経過した雑誌は貸出しができません。

2012年現在、2009年以前の雑誌は貸出不可です。

大正期以前に刊行された図書も貸出しができません。

上記以外にも、県立図書館では博物館に関する資料を所蔵しております。

お探しの資料がありましたら、お気軽にお問い合わせください。

